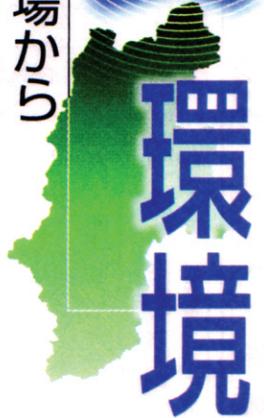


木文

信州の現場から



活動編⑤

「あれ、イノシシかな」。上松町の森で、ヒノキの間伐に取り組んでいる吉川正樹さん(四三)が足を止めた。足元の黒い土がえぐられたようになっていたからだ。

かがんで確かめると「間違いない。夜、うろちょろしていたんだろう。足跡を見つけると、この動物は何をしていったんだろう想像するように再び足跡をのぞき込んだ」。

国有林の間伐を二十年間担当した後、林業とヒノキ関連製品の開発・販売を手掛ける会社の役員を務める吉川さん。三月、信州大の講座を受講して「自然環境診断マイスター」になった。

マイスターは動物や植物、湖沼、大気、地質、遺跡調査の六分野の専門知識を持ち、身近な環境を調べたり監視したりする。「環境マインドをもつ人材養成」を掲げる同大が二〇〇七年十月、文部科学省の助成を受けて始めた全国でもユニークな制度。社会人が半年間の短期集中で学ぶのが特徴だ。

間伐したヒノキを見上げる吉川正樹さん。森の中での「気づき」が増えたと話す=上松町で



専門知識学び活動

環境監視の人材育成

なった知人に受講を勧められた。しかし、土曜、日曜のほぼすべてが講義や実習、リポート執筆に費やすことになるため、ためらったが自然をもう一度、根本から勉強してみよう」と思い立ったといつ。

「木の引っかき傷、落ちてないのは〇四年。二十一世紀は地球全体の中で考える限り、温室効果ガス、地球温暖化の中での『気づき』が増えた。自然の移り変わりも、長い歴史の流れの中で考へるよ

うになった」と、吉川さんは、「だからこそ」というのが理由。同大は、「環境と人間」を信州大が環境マインドをもつ人材養成を全学共通テーマが、さらに充実させる方針を語る。

信州大が環境マインドをもつ人材養成を全学共通テーマが、さらに充実させる方針を語る。

信州大が環境マインドをもつ人材養成を全学共通テーマが、さらに充実させる方針を語る。

小坂共栄副学長は「企業も環境が豊かな場所にある大学

も担当する。二期まで終了し、計50人が認定された。第四期は今月上旬から始まり17人が受講を予定する。第

自然環境診断マイスター制度

大学の学部生より一ランク上の修士課程レベルの専門知識と実習を

学ぶ。自然の再生や保護、子どもたちへの教育

などで相談に乗ったり提言したりといったことが

実施し、将来的には四年間の講義の中で、ある程度の専門知識まで学べるように体系づけることも視野に入れている。

リキュラム見直しに合わせて実施し、将来的には四年間の講義の中で、ある程度の専門知識まで学べるように体系づけることが狙い。

吉川さんは最近、会社の基本理念に「ムササビの舞う山づくり」という項目を加えた。「風通り、日が差し込み、木の実も落ちている。木曽の山をそんな森にしたい。ムササビがいる山は豊かな証拠だから」と。(石川浩)